
青髭ウラル卿 七番めのワルツ

上岡マヒサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青髭ウラル卿 七番めのワルツ

【Nコード】

N1509BA

【作者名】

上岡マヒサ

【あらすじ】

森の中のお屋敷に住むのは、四人の兄妹。子爵家の美しい娘リディアは頼れる兄達やメイドのコレットと共に平和な日々を送っていたが、世間で“青髭 あおひげ”と呼ばれる上流階級の男“ウラル”から思わぬプロポーズを受けることとなる。それは祝福されるべき夫婦の契りであったはずだが……

兄達の苦悩、また富と名声を併せ持った男の知られざる過去とは？

【特に後半辺りに残酷・流血描写等がある予定です。更新は基本不定期ですが、遅すぎることはないつもりです】

序、「要は素直になれただけなのです」(前書き)

皆様方、どうぞよろしくお願い致します。

この物語は童話『青ひげ』をモデル&脚色した作品になります。

序、「要は素直になれないだけなのです」

とある国のとある森に、それはそれは美しい娘が住んでおりました。

その娘には三人の頼もしい兄がおり、兄妹四人で幸せな生活を営んでいたのです。

「お兄様、紅茶を淹れましたよ」

プラチナブロンドを緩やかに波打たせながら、リディアは兄の向かう机の隅に白い湯気の緩々と立ち上るカップを置いた。作業の邪魔にならないように。

紅茶の芳しい香りに誘われるようにして兄は顔を上げ、更に妹を見上げるとにこりと笑いかけた。

「ありがとうリディア。いい香りだね」

兄の穏やかな褒め言葉に、彼女はこそばゆそうにそっと白い歯を覗かせる。つい最近になってから奥ゆかしい雰囲気を纏うようになってきたリディアだが、こうして笑ってみればやはり年相応にあどけない娘だった。

リディアには三人の頼れる兄がいる。

今目の前にいるのが長男のレイモンドで、この屋敷の当主でもある二十六歳の青年だ。兄妹達のまとめ役を務めるしっかり者のこの兄は、今日も仕事に追われて忙しい。書斎で書き物をしていたらしい。

そんな忙中閑のなかなか見つからない兄の為に紅茶を淹れてあげるのが、リディアの役目だった。

仕事は全て兄達が引き受け、彼女は屋敷の中にただ居座るだけしかできなかった。ならば、せめて自分のでき得る限りのことはしようと、得意の紅茶を兄達に振る舞うようになったのだ。

果たして、兄達は喜んで彼女の紅茶で心を安らげ、また楽しみにしてくれている。リディアはきちんと兄達の役に立てたのだ。

レイモンドはカップに口をつけ、一口啜る。

「ふう。リディアの淹れた紅茶は美味しいな。こんなに美しい妹に、こんなに美味しい紅茶を淹れてもらえる幸福な兄は、私達を置いてこの世に存在するはずがない」

「ふふふ、お兄様ったら」

リディアが笑えば、花びらがパツと舞うように可憐だった。

「お世辞がお上手なんだから」

すると、レイモンドは体を傍らに立つ彼女に向け、足を組む。

「お世辞なんかじゃないよ？ お兄様はいつだってお前には正直だ」

彼は大きな手で彼女の白い頬を撫で、大仰な顔つきで言ってみせる。小さい頃からリディアの頭や頬を撫でてきた、優しい手だ。

「可愛いリディア。可憐なリディア。いつまでもお兄様を照らしておくれ」

「ええ、もちろんですとも」

彼女は頬に当てられた手に両手を重ね、目を瞑ってその温もりを

感じ取った。

兄は仕事で忙しい。そんな兄にこうして構ってもらえる彼女は、幸せ者だ。

「ああ、そうそう」

そこで、レイモンドは思い出したようにリディアに話しかけた。

「キリクがお前のことを探していたよ」

「キリクお兄様が？」

キリクとは、二人目の兄のことだ。真面目なレイモンドとは正反対で、粗野な言動の目立つ人だった。

「あの乱暴者め。ノックもなしに私の部屋に立ち入り、『リディアはどこだ！』と叫ぶ一方だ」

「まあ、ふふ」

レイモンドの呆れたような、疲れたような顔を見て、リディアは思わず口元から笑いを零した。キリクも相も変わらず遠慮がないようだ。

「それで、どうなさったのですか、お兄様は？」

「リディアは乱暴者は嫌いだって言ってやれば、罰の悪そうな顔して出ていったよ。お前に嫌われるのが怖かったんだな。」

尤も、少量の薬でしおらしくなるような器ではないがね、我が弟君は」

レイモンドはソーサーからカップを手慣れた動作で取り、再度優雅に口に運んだ。

「でも、そんなキリクお兄様らしさが、私は好きですわ」

レイモンドはキリクの性格を悪い風に言うが、リディアはそんな彼の中からも粗野な優しさを感じ取れるのだ。

「おや」

彼は興味深げに彼女の顔を覗き込んできた。

「要は、素直になれないだけなのです」

リディアがきっぱりそう言えば、レイモンドは屈託なく笑い出した。

「ははは、尤もだ。だがね、リディア。そのことは決して本人の前では言っておけないことだ」

彼女は小首を傾げる。

なぜ言ってはならないのか、リディアには理解できなかった。それとも、彼女にはまだ疎めの大人の事情という奴だろうか。

「まあ乱暴者にも乱暴者なりの、それ以前の男としてのプライドに関わってくるところもあるだろうな。どうか触れないでやってほしい」

リディアはプライド、という言葉に敏感に反応した。

「プライドは、殿方が最も大切にされるもの。それに触れるなど、恐れ多いことですわ」

レイモンドはカチャリ、とカップを皿に戻す。

「わかればいいんだ、リディア。お前ができた娘　こ　でよかったよ」

「でもお兄様。私はキリク兄様にお会いした方がよいと思うのです。そもそも、キリク兄様はその為にこのお部屋にレイモンド兄様を訪ねにいらっしやっただのですし」

リディアは今頃彼女を探し回っているだろうキリクの姿を思い浮かべながら、レイモンドに心配げな翡翠の双眸を向ける。

ただちに彼の元まで赴く必要があるのではないだろうか。

「あちらの勝手な用事なのだし、お前がわざわざ足を疲れさせることはないよ。あちら側が探し当てるまで、普段通りに過ごせばいい」「そうですか？」

リディアは目をぱちくりと瞬かせる。

「そうだとも。第一心配しなくとも、キリクお兄様は屋敷その周辺を走り回ってるわけだから、すぐにお前に当たるはずだ」

「確かにそうですわね」

彼女はぱつと花が咲き開いたかのように明るくなった。

「でも、あのぶつきら棒なキリク兄様が私に用があるなんて、一体どうしたというのでしょうか」

普段から無愛想な態度ばかり取ってくるキリクは、一見リディアには無関心といえる。何らかのきっかけがない限り、彼から進んで

彼女に話しかけてくることなど滅多にないのだ。
そんなキリクが今、妹に積極的になっている。

「あの方のことですし、よっぽどなことなんだわ」
「何にせよ、まずは彼と会って確かめることだね」

レイモンドは机に体勢を整えると、ペンを持ち仕事の続きを再開した。

「そうですね」

リディアはひとまず納得し、トレイを抱えて兄の書斎を後にする。

森の中のお屋敷に住むのは、四人の兄妹。

しかし、なぜこの兄妹達は世間の喧噪から隔絶されたこの土地に住むようになったのだろうか。

そして町の方では、ある噂があっちこっちへ流れていることをあどけないリディアはまだ知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1509ba/>

青髭ウラル卿 七番めのワルツ

2012年1月4日00時52分発行